

否定する破壊的なファシズムのもつインブリケーションに対しても無関心であった。イタリアのシオニストはファシストにけつして抵抗しなかった。彼らは最後にはファシストを賛美し、ファシストのために外交渉まで引き受けた。改訂派の大半、また他のいくつかの右派はその熱烈な帰依者となった。穏健派ブルジョア・シオニスト指導者のヴァイツマン、ソコロフ、ゴルトマンらは、ファシズムそのものに関心をもたなかった。ユダヤ分離主義者として彼らはただひとつの問い、シニカルな古典的問いを投げかけただけであった。「そうか？ それはユダヤ人の得になるのか？」世界全体にとって問題になることさえユダヤ人にとってはよい場合もありうることを含んでいた。彼らの関心はただローマが国際連盟で友になるか敵になるかであり、ムツソリーニが彼らの友人かつパトロンであるということだけであった。ナチ勝利以前の彼らの世界でムツソリーニが重要な存在であったら、一九三三年以降もムツソリーニに盲目的に求愛していくことになってもさして驚くに値しないことであった。

## 第15章 オーストリアと「クリスチャンの中の、シオニズムの友たち」

第一次世界大戦は四つの帝国を破滅させ、中央ヨーロッパに一群の新国家を生み出した。これらの国家の中で成立正当化の根拠づけが最も困難だったのがオーストリアであった。構成民族は実際すべてドイツ人であり、一九一九年、オーストリア議会は、たった一票の反対を除き、ドイツとの合邦を賛成決議した。しかし連合国はこの合併決議を認めず、社会民主党中心の連合政権も統治を続けておこなうのに熱心ではなかった。左翼はなおウィーン市政のコントロールを維持することができてはいたが、一九二〇年夏、反セム主義のキリスト教社会党がオーストリアの中央政府の権力を握った。

当時三つのイデオロギー潮流が、手足をもがれたこの共和国の中で権力獲得闘争を繰り広げていた。オーストリア共産党はヨーロッパ諸共産党の中では最弱の党のひとつであり、社会民主党は自らの右翼の敵が農民・都市下層中産階級のキリスト教社会党、および専門職・ホワイトカラーに基盤をもつ反セム主義民族派であるとみていた。この二つのブルジョア党派集団はデモクラシーに敵対していたが、ウィーンにおける社会主義の巨大な勢力、英仏への財政的依存ゆえにクーデタは不可能だった。しかし社会民主党もキリスト教社会党も実質的な党軍の維持に余念がなかった。

「この偉大な愛国者にして国の指導者」

社会民主党の最初の指導者、ヴィクトア・アドラーはユダヤ人であり、同じく党の指導的理論家オト・パウアーもユダヤ人であり、党指導部のほぼ半分がユダヤ人であった。不可避免的に運動はつねにユダヤ人への脅威を党にとつてのおそろべき危険とみなしていたから、それに従って行動した。労働者陣営はユダヤ人同胞にきわめて忠実で、反セム主義者との暴力的戦闘をすこしもためらわなかった。それはヒトラー自身も書いているとおりで、『わが闘争』には彼の最初の賃仕事、第一次大戦前のウィーンのある建設現場での経験が書かれている。

これらの男たちはすべてのものを拒否した。すなわち「資本家」（このひとつの言葉をどれほど頻繁に聞かされねばならなかったことか）階級の発明としての国民、労働者階級の搾取のための、ブルジョアジーの道具としての祖国、プロレタリアート抑圧の手段としての法律の權威等。……泥沼に引き込まれないものはひとつとしてなかった。……私は沈黙しようとした。しかしついに……私は立場を明らかにしはじめ……或る日彼らは理性を最も簡単に征服してしまう武器を利用した。反対者側のスポークスマン数人が建築現場をすぐに立ち去るかそれとも足場から落とされるか、どちらがいいかと強要した。<sup>(1)</sup>

ナチスの最初の兆候が一九二三年ウィーンにあらわれた時、はじめから社会民主党の労働者はこの新しい党と闘った。鍵十字の旗をかついだ暴力集団がユダヤ人の不意をおそって襲撃しはじめ、或る時などは

一人の労働者を殺した。この事件のために社会民主党員は数千人規模で街頭に練りだして闘いに備えた。当時のアメリカ・ユダヤ人をリードしていた雑誌『メノラ・ジャーナル』の記者はその帰結を書いている。

それ以後はどんなボグロム集会も妨害を受けることなく開けなくなっている。組織労働者、社会民主党員、共産党員はしばしば反セム主義者の集会に押し寄せる。それはユダヤ人によしみを感ずるからではなく共和国の存亡が岐路に立っていると信じているからである。<sup>(2)</sup>

オーストリア・ユダヤ人の大多数が社会民主党を支持していた。そうでない少数派にシオニストの「ユダヤ国民党」があつたが、そもそもユダヤ人はオーストリア総人口のわずか二・八パーセント、ウィーンの有権者の一〇パーセントしか占めていなかった。小党のユダヤ国民党はたった一度候補をオーストリア議会に一人当選させただけであつた。一九一九年にドイツとの合邦に唯一反対票を投じたのはこのユダヤ国民党議員ローベルト・シュトリツカーであつたが、この行動によつて一九二〇年の選挙での彼の敗北が確実になつてしまつたのであつた。一九二〇年代初期シオニストはウィーンの市議会では三議席をえていたが、一九二〇年にはウィーンのユダヤ系市民の二一パーセントの票を獲得し、一九二三年にはさらに得票率を（ユダヤ系市民の）二六パーセントに伸ばした。しかしシオニストの票はその後急速に減り、一九三〇年には全体票の〇・二パーセントにまで落ち込んだ。<sup>(3)</sup>オーストリアの政治生活におけるユダヤ国民党の役割はとるに足りないものであつたが、その短い経歴はヨーロッパ・シオニズムの孤立度と小ブル性を反映していた。ユダヤ国民党支持者のほとんどは自らがパレスティナに向けて出国することは考えていなかった。ウィーンのユダヤ人の多くはつい最近ガリツィアから到着したばかりの人びとであつた。ユダ

ヤ国民党のシオニズムはゲットー・メンタリテイの最後の痕跡を示していた。反セム主義に対する抗議をあらわすものではなかったのである。抗議の運動はむしろオーストリア社会民主党の防衛隊員の街頭闘争に鮮明にあらわれていた。オーストリア・シオニズムは社会主義に対する小市民のプロテスタであった、キリスト教社会党は、自らのラディカルな敵手たる社会民主党からユダヤ国民党が幾分なりとも票を奪うのをつねによるこんで眺めていたのであった。逆にシオニストの側でもキリスト教社会党を敵とはみなさなかつた。ソコロフがちょうど南アフリカのダーバンに滞在していた時にそこでオーストリア・ナチが七月二五日一揆をおこし、クーデタは失敗しながらも首相エンゲルベルト・ドルフスを殺害したというニュースに接した。彼はユダヤ・クラブの聴衆に、次のように述べ、故人の運命を想起するよう要請した。

ひじょうに懇意にさせていただき、頻繁にお会いしていただいていたこの偉大な愛国者にして国の指導者であられた故ドルフス閣下は、我々と大義をともにする友人のおひとりでした。閣下は、私もお手伝いさせてもらう中、首都〔ウィーン〕親シオニズム・キリスト教友の会組織を設立された方のおひとりでした。

キリスト教友の会は、一九二七年に設立された。一九二九年、シオニスト・ハコア・アスレチック・クラブの元会長フリッツ・ローナー・ペーダーは、反動派が社会主義者をやっつけるようになれば、社会民主党を支持した廉でユダヤ人もひどいめに遭うと警告、もし右翼がその反セム主義の看板を降ろしてくれさえすれば、ユダヤ人はファシストの護国団（ハイムヴェーア）を支持すると約束しながら続けて述べ、無神論、反国粹主義、反資本主義としての社会主義はまさにユダヤ人にとって最大の敵であると主張した。

「オーストリアの虐殺の物語を外国へまきちらしていることを我々は非難する」

キリスト教社会党はナチズムを自らの権力に対する脅威として恐れながら、ヒトラーの成功によってドルフスは独裁が少なくとも中央ヨーロッパに到来しつつあることを確信し、最終的にはムッソリーニの恒常的な忠告を重んじつつ社会民主党を挑発して一九三四年二月の武装蜂起に追い込み、三日間の闘いでこれを鎮圧した。この際、護国団がウィーンの有名な労働者住宅のカール・マルクス団地を砲撃し三千人を超える労働者が殺害されたが、この虐殺に対するシオニストの反応はきわめてはつきりとしていた。党集会で事件をめぐる話の中でローベルト・シュトリッカーは、ユダヤ人の迫害に関して外国で出回っている報告を難じた。この運命の数日間もオーストリアは他の地域ではまず見られぬような高次の文化を明示していたと述べ、報道はまちがっていると主張したのである。事実ドルフス体制はユダヤ人に対する過酷な差別政策、とりわけ政府機関からの排除に乗り出し、専門職のユダヤ人も解職された。しかし同化主義の社会主義ユダヤ人に対するその敵対関係から、シオニストは地方レベルまた国際的レベルでキリスト教社会党を弁護することになった。一九三五年、政府は「ヌメールス・クラウズス」（入学許可数制限）にかこつけてユダヤ人学生を分離排除する計画を告示した。全面的な学校機関からの分離排除に向けての第一歩だとして当然同化主義ユダヤ人は計画に反対したが、シュトリッカーは新たなゲットー・スクール制を歓迎した。その同じ年、オーストリア外務省が世界の新聞にあらわれた「虐殺の物語」レポートに対する激しい非難を展開すると、オーストリア・シオニスト連合機関誌『デア・シュティメ（声）』はあわてて以下のような説明をおこなった。

今日国を密封状態に閉ざし、反ユダヤ・アジテーションを含め諸事件を隠すことは不可能である。オーストリアの虐殺の物語を外国へまきちらしていることを我々は非難する。しかしこれはユダヤ人によってなされたのではなく、外国で読まれているオーストリアの新聞によってなされているのだ。

キリスト教社会党政権には、自分たちが外国の保証なしにはとうていヒトラーの敵たりえないことがわかっていた。自分たちを軍事的に保護してくれるものとムツソリーニを当てにする一方、また英仏の銀行からの資金的支えも必要としており、外国の潜在的支持者に対し自分たちはナチスのイミテーションではないということも納得させなければならなかった。一九三四年五月、ドルフスは古参のシオニストでウィーン・ユダヤ教信徒共同体の長でもあったデジデル・フリートマンを国家評議会評議員に任命した。シオニズムに対しては他にも似たようなジェスチャーが体制から示された。改訂派にも国家評議会の富裕なメンバーから場所が与えられ、訓練センターとして用いることが認められた。改訂派の著作家のひとりは大な地所での場面を後に回顧して、そこに「規律ある兵営が出現」したと書いている。一九三五年九月にオーストリア政府は改訂派に対しウィーンでの新シオニスト機構設立会議開催を認めた。

対外政策上の諸理由から、体制はユダヤ人に対する差別をおこなっているのを否定したが、他方ではいわゆる「ヌメールス・クラウズス」のような愚にもつかぬ理由を口実にして反セム主義の政策を正当化した。一九三四年以降、形式上はキリスト教社会党を含むあらゆる政党にとってかわった祖国戦線にユダヤ人が参加しうる権利も法的には与えられていた。しかしムツソリーニがヒトラーと同盟することに決し、もはやオーストリア政府の保護をムツソリーニに期待できないことが明らかになると、体制はナチによる政権奪取を回避すべく絶望的な闘いを展開せざるをえなかった。一九三八年一月、ヒトラーに対し、オー

ストリアは断固独立を維持するが、なお「ドイツ人のキリスト教国家」であることを明示しようとし、祖国戦線内にユダヤ青少年の分離組織を設けた。『エンサイクロペディア・ジュダイカ(ユダヤ百科事典)』の「オーストリア」の項目には、「シオニストはよるこんでこれを受け入れたが、逆にこれは同化のためにと慮っている人びとを怒らせた」と意味深長に述べている。しかし、ドイツのナチスを介入させないためにオーストリア政府はより反セム主義的になっていきながらも、外国からの財政的支援を獲得するためにはシオニストを利用するのをためらわなかった。一九三八年初、アンシュルス直前の数週間、デジデル・フリートマンは大急ぎで外国をまわった。三月九日にドルフスの後継者クルト・フォン・シュシュニクは独立に関する三月一四日の国民投票を告示する最後の賭けに出、シオニストの支配するユダヤ共同体組織は急ぎウィーンのユダヤ人リストを作成してシュシュニクの運動支援の基金への寄付を募った。ヒトラーはシュシュニクよりずっとリアリスティックな方策を有し、シュシュニクに単刀直入に命令を下し、同一一日、彼を辞任させた。翌一二日、ドイツ軍はオーストリアに進攻した。

キリスト教社会党にシオニストが頼った馬鹿さ加減

オーストリア右翼に対するシオニストの支持は正当化されえただであらうか。キリスト教社会党がユダヤ人とナチスの権力奪取との間にあった唯一の防壁であったという主張がなされうるかもしれないが、ヒトラーがまだ脅威にはなっていなかった一九二〇年代すでに、キリスト教社会党とナチスの同盟関係は始まっていた。ユダヤ人にとってのキリスト教の友人のエスタブリッシュメントは反ナチ的観点からは弁護されえない。事実オーストリアの右翼は、ドルフスもシュシュニクもドイツの権力奪取の阻害要因にはなり

えず、むしろ逆にナチの最終的勝利を保証したのであった。一九三〇年代に社会民主党地下活動のリーダーだったヨーゼフ・ブッティンガーは著作『社会主義の薄明の中で』において当時の現実について述べている。オーストリアには反ナチ多数派が存在したが、この状況に特有の政治的チャンスはシュシュニクは利用することができなかった。シュシュニクは褐色のファシズムに対抗するどんな大衆動員も妨げざるをえなかった。真の自由獲得の闘いがおこなわれればシュシュニク自身避け難く粉砕されることになるからであった。ブッティンガーは当時について、「オーストリア問題が重要な限り」と書きながら、この大衆動員が肝腎の事柄であった、「というのも究極的にオーストリアの運命は国際的諸力によって決せられるからである」と述べている。ヒトラーは好機を選んでオーストリアを攻撃してくるであろう。その時を彼は気もそぞろに待っていた。「一方で、防御の組織化をつぶす点では彼がまちがいないとした」<sup>12</sup>シュシュニク体制とともに。

オーストリア・ユダヤ人はただひとつの望みをもっていた。すなわち地方レベルおよび国際的レベルでの社会民主党との断固たる同盟を望んでいた。信用を落としていたドイツの社会主義者たちと違ってオーストリアの社会民主党は、組織化は低度であっても英雄的に闘った一九三四年のレジスタンスの後もほとんど無傷であった。ドルフス体制はファシスト国家の中でも最弱で、二月一二日の社会主義者たちの虐殺の後でさえ、新しい政府は自らの警察組織によってではなく、いざという時にはドルフスのために闘わんものと国境付近に待機しているイタリア軍やハンガリー軍の威嚇的存在誇示によって保たれていた。また社会民主党の権力掌握があればドイツ軍は黙認せず介入するということが同様に確かだったことも大きかった。むずかしい国際環境にしても、オーストリアの体制の強さにしても過小評価できないのは明らかだが、オーストリア問題で欧米では巨大なデモンストレーションが展開された。しかし、シオニストは援軍

として、オーストリア内外の社会民主党を当てにせず、最後は銃を一発も発射せずヒトラーに降伏した体制のほうを当てにしたのである。世界シオニスト機構代表のゴルトマンは、オーストリア国外のユダヤ人が示威によって反セム主義を圧伏しようとするのを意識的に妨げ、かわりにムツソリーニの舞台裏の密談呼びかけのほうに信をおくことにしたのであった。

叢書・ユニベルシタス 705

# ファシズム時代の シオニズム

レニ・ブレンナー著  
芝 健介 訳

